

■パネルディスカッション【事例報告】

◎NPO法人 肥前浜宿水とまちなみの会

○テーマ：浜宿独自の歴史と生活文化にあふれた活力ある町の実現に向けて

○発表者：事務局長・中村雄一郎（なかむら ゆういちろう）

団体所在地：〒849-1322 佐賀県鹿島市浜町乙 2688

☎0954-69-8004 E-mail：npohama@po.asunet.ne.jp

理事会等：理事 10 名（理事長・中島丈夫）

会員数：正会員 120 名（内法人 2 名）

年会費：正会員 1000 円、賛助会員 なし

設立年月日：2005（H17）11 年 29 日

●地区の概要

肥前浜宿は佐賀県南西部有明海に面した人口 31000 人の鹿島市の東部に位置する。歴史的な名称は浜宿で会の名称である肥前浜宿は保存運動の過程で誕生した造語である。江戸時代から醸造業（主に酒造業）が盛んで、全盛時には 14～15 の蔵元がありそれらの建物が保存されているが、今日まで継承されている蔵元は 3 蔵である。米、水、海運の立地の中、引き継がれた酒造りは九州でも指折り昨年大吟醸鍋島が世界一の酒の称号を得た。



●ゼロからのスタート

1989 年（H元）まちづくりの活動が緒につき、歴史講座やウォークが始まった。1993 年（H5）「クラシックイン浜」が誕生し、酒蔵コンサートが始まった。毎年春と秋に開催する中で酒蔵通りの景観や、酒蔵が評価されるようになったが、当時は、「将来的に観光客を呼べるような町になればいいよね」という願望程度のものであった。1996 年（H8）文化庁の担当官が浜宿を視察、1997 年から保存調査事業が始まり 1998 年に完成した。その翌年から活性化マスタープランの検討に着手し、将来像づくりが行われた。建物を保存活用するには、重伝建選定しかないという考え方で一致し、文化庁、県、市との折衝が行われた。推進母体として、2001 年に現在の組織の前身である肥前浜宿水とまちなみの会が発足した。

●保存か開発か。そして行政との連携

調査報告書が完成した当時浜町では浜川の河川改修事業と国道の局部改修事業が行われており、調査対象地域を二分していた。その関係で伝建地区のエリアの確定が

進まず、2002 年（H14）鹿島市では先行して街なみ環境整備事業に着手することとなった。水とまちなみの会ではこの年にまちなみスケッチ大会、花と酒まつりのイベント事業の強化が行われ、そして、河川改修がまちなみ環境を阻害しないようにと要望して、浜川河川協議会が設置された。2003 年市長とまちなみの会の方向性が一致し、重伝建選定へ向けての準備が進められた。このことにより、行政と太いパイプが繋がりまちなみ案内所継場の完成、地元説明会、浜宿まちづくりのためのまちなみ活性課が新設された。

●保存運動の核 継場・旧乗田家住宅・そして選定へ

活動拠点としての継場の完成で会の運営が円滑になり、会員の意識が高まっていった。2004 年には東京在住女性より旧乗田家住宅修復のため多額の寄付を受け、その受け皿として 2005 年に水とまちなみの会は NPO 法人となった。2007 年に完成した旧乗田家住宅（写真）は、継場とともに浜宿の核になる建物としての在り価値は大きい。



この間、国、県の助成金をいただきながら地区住民の意識醸成のためのイベントや研修に取り組み「佐賀の美しい景観」「歩きたくなる道 500 選」等に選定された。

また、街なみ環境整備事業による公園整備や国の登録文化財への積極的な取り組みもなされ、2006 年 4 月念願の国の重要伝統的建造物群保存地区に選定された。

●まちづくりの方向性・課題は

「浜宿独自の歴史と生活文化にあふれた活力あるまちづくり」これが私たちの求めるもの。すなわち、建物を保存修復するだけでなく、いかに活用されるのか。浜宿に根付いた歴史、文化を伝建地区でどのように表現するのか、その方向性はあるものの実現するためには、空き家、高齢化、後継者不足等の課題が山積している。将来的なことを考え「肥前浜宿」を商標登録して、日本酒や関連グッズの販売がスタートをしたが地域ブランドまでは育っていない現状である。昨年は茅葺き町家への体験宿泊のモニターツアーも他団体と共同で実施をしたが具体的な動きは出来ていない。

そのような中でも着実に観光客は増加し、今年三月末に開催した花と酒まつりは、鹿島酒蔵ツーリズムとの共催ということもあり、3 万人の人出があった。鹿島の歴史、文化あわせて自然をアピールすることにより、都市部からの集客を図るニューツーリズムに乗せて発信することにより、新たな展望が開けるものと確信している。